

## 論文

## 進化社会理論とマルサス

進歩をめぐる人口圧の二面性

藤田 祐

## 1 序

19世紀を通じてイギリスでは、貧困が問題視され貧困にどう対応すべきかが議論されていた。特にヴィクトリア時代後期は、都市の貧困調査が開始されるなど貧困問題への関心が高まった時期だとみなされてきた。一方、1834年の救貧法改定に結実した19世紀前半の議論に大きなインパクトを与えたのが、マルサス (Thomas Robert Malthus, 1766-1834) の『人口論』であり、この議論の延長線上に進化社会理論が展開する。

1831年末からの5年間に及ぶ調査旅行から帰国しロンドンに滞在していたダーウィン (Charles Robert Darwin, 1809-1882) は、新救貧法を支持する改革派ウィッグのネットワークのただ中で本格的に自然史研究に取り組み始めた。1838年秋、『人口論』第6版を読んだダーウィンは、自然界が苛酷な生存競争の世界だということを深く認識し、個体を生死のふりいにかける生存競争が適応と進化をもたらす創造的な過程だと考えるようになる。<sup>1</sup> 同時期に鉄道技師として働いていたスペンサー (Herbert Spencer, 1820-1903) は、鉄道会社を退職して著述家の道を歩み始め、非国教派の新聞に掲載した論文で人口問題にも言及しながら救貧法の問題点を論じた。<sup>2</sup> そして、『エコノミスト』の編集者を経て本格的に著述活動を始めていた1852年には、「人口理論」を執筆して『ウェストミンスター・レビュー』に掲載する。<sup>3</sup> 1830年代後半から十分の一税の金納化に伴う土地測量事業に従事していたウォレス (Alfred Russel Wallace, 1823-1913) は、1840年代初頭に測量を行ったウェールズの農村で、新しい負担を課せられ困窮する農民の惨状を目撃した。1840年代半ばに『人口論』第6版を読んだウォレスは、12年ほど経た1858年2月、熱病にかかっ

て苦しんでいた東南アジアの島で、人口の制限に伴う困苦というマルサスが提起した問題を再び思い起こし、不足する生存手段をめぐる競争する種族が生き残るものと死んでいくものとに振り分けられるメカニズムについて考察したとされている。生存競争を通じて適者が生き残っていくという進化のメカニズムを思いついたウォレスは、自らの理論を論文にまとめてダーウィンに送付し、翌年ダーウィンが『種の起原』を出版するきっかけをつくった。<sup>4</sup> 『種の起原』で提起された自然選択のメカニズムでは、人口圧が生存競争において生殖以前に不適者を死に追いやる圧力となる。人口圧がもたらす生存競争で環境により適応した個体が多く生き残ることを通じて、種全体が環境に適応するように進化していくのだ。<sup>5</sup> このダーウィン進化理論を前提にして、ハクスリー (Thomas Henry Huxley, 1825-1895) は、貧困問題への関心が高まっていた1890年前後に、文明社会を脅かすマルサスの人口圧を強調することによって、急激な社会変革で貧富の格差を解消しようとする社会主義を批判する。一方、社会改革を強く求めるようになったウォレスは、1890年の「人間選択」で、世紀半ばの「人口理論」に言及して、改革を経て平等が実現した社会では食糧不足をもたらす人口圧が低減していくと論じた。<sup>6</sup> これらの進化理論家は、マルサスが提起した問題と対峙しつつ、自らの進化理論を展開していったのである。

1798年に匿名で出版された『人口論』初版では、神が創造した人間本性についての不変の法則から人口原理が導き出され、人間性の完成と平等社会の実現は不可能だと主張されている。<sup>7</sup> 人間の生存には食糧が必要なこと、そして、両性間の情欲は変化しないこと、これら二つの公理に基づいて、人口増加力が食糧増産力をはるかに上回るという原理が提示され、人口増加の圧力による慢性的な食糧不足のために実際の人口増加には強いブレーキがかかると論じられる (FE 11-38)。人間本性に根ざした人口圧が必然的に社会に困窮と悪徳をもたらす (FE 71-100)、たとえ急進派が理想とする平等社会が実現したとしても、理想状態であるがゆえに急激に人口が増加し、人口圧が促す生存手段を求める競争を通じて不平等社会に到るのだ (FE 173-209)。さらに、『人口論』初版の最後の2章では、神が世界を創造した目的を探究し神の摂理を意味づける自然神学の枠組みで人口原理が論じられ、悪がどうしてこの世に存在するのかを問い神の全能性や善性を擁護する神義論 (theodicy) が展開

される。そこでは、人口圧こそ精神の形成という神の創造の目的を促進し、さらなる善をもたらす原動力だと論じられる。人口圧がもたらす困窮と悪徳を避けようと人々が食糧生産などの活動を行うことを通じて、文明が発展し人間精神が高められていくからである (FE 348-71)。マルサスの神義論によれば、人口圧による害悪も含めて自然に部分的に存在する悪は善を生み出す自然のメカニズムの一部であり、「理性によっても経験によっても示されることは、自然の無限の多様性が……創造の崇高な目的を促進し可能なかぎり大量の善を生み出すのに見事に適合していること」なのである (FE 379)。無限の進歩が不可能であると論じている『人口論』初版では、人口圧がもたらす害悪だけでなく、神義論を軸とする自然神学に基づいて、人口圧がもたらす進歩についても論じられている。マルサスの人口原理と自然神学は、進歩を妨げるとともに進歩を促すという人口圧の二面性を提起しているのである。

ダーウィンとウォレスがともに自然選択理論の源として『人口論』に言及したことから、マルサスと進化理論との関係が研究者の注目を集めてきた。中でも、マルサスとダーウィンとの連続性を強調した古典的研究がヤング (Robert M. Young) によるものである。ヤングによれば、自然神学の枠組みに基づく「自然における人間の位置」をめぐる「共通の議論」が、19世紀前半に展開し進化理論につながっていく。この「共通の思想的コンテクスト」におけるマルサスの重要性は、第一に、自然界に存在するすべての生物と同じように人類が自然法則に支配されている点を強調したことであり、第二に、善意に満ちた調和よりも亀裂や対立が前面に押し出された自然イメージを提起したことである。その一方で、人口圧がもたらす害悪を「自然の無限の多様性」の中に位置づけるマルサスの人口理論は、「自然における調和」を強調するウィリアム・ペイリーの自然神学にも取り込まれた。ヤングによれば、人口圧に由来し自然に不均衡をもたらす生存競争 (マルサス) を通じて、自然における神の摂理の根拠とされた環境への適応 (ペイリー) がもたらされるとしたのがダーウィン理論なのである。<sup>8</sup> しかしながら、ヤングの古典的研究では、不変の人間本性を前提にしてマルサスが提起した問題が、変化する人間本性を前提にする進化社会理論でどのように展開したのかという点は十分に論じられてはいない。それは、貧困にどう対応すべきかという問題、そして、貧困のない理想社会への進歩という考え方に対して提起された、

進歩を妨げるとともに促すという人口圧の二面性をめぐる問題である。

不変の人間本性に基づいて理想社会の不可能性と人口圧の二面性を提起したマルサス理論が、変化する人間本性を前提にする進化社会理論においてどのように位置づけられているのか。スペンサー、ウォレス、ハクスリーの進化社会理論において、人口圧という概念がどのように機能しているのかを分析することで、この問題を探究することが本論文の課題である。

## 2 理想社会への進歩と人口圧 初期スペンサーの人口理論

人口圧の二面性が明確に表されているのが、『ウェストミンスター・レビュー』に掲載された「動物の繁殖力についての一般法則から演繹される、人口理論」(1852) である。スペンサーが執筆した「人口理論」の大部分は、個体の自己保存力と種の増殖力が相反するというテーゼの論証によって占められている。このテーゼに従えば、自己保存力が高く次世代の個体が多く生き残る高等生物は、多くの個体を生み出さなくても種の維持ができるので、個体の生命維持能力が高まるにつれて生殖能力が減退していく (TP 475-96)。続いて、この法則が人類に適用される。「人口理論」によれば、人類は生命維持能力と生殖能力が均衡していない過渡期にあり、必要以上の生殖能力ゆえに人口圧に追い立てられている。動物の繁殖力についての自然法則から類推すれば、文明化により生命維持能力が高くなったため、人類の生殖能力は減退し人口圧も弱まっていくはずである (TP 496)。しかし、「人口理論」によれば、目下のところ、「この過剰な繁殖力に必然的に伴って、生存手段に対して不断の人口の圧力がかかって」おり、「現在と近未来だけを見ると、制限されない場合、人口増加率が食糧増加率を上回るとは疑いなく真理」なのである (TP 498)。近未来については、マルサスの人口原理が真理であり、人類は人口圧からは逃れられないというのである。

同時に、「人口理論」では、進歩の原動力として人口圧が提示されている。生存手段を上回る人口増加によって、食糧の生産性が改善し、科学技術、知性、自制心、社会性、そして人間性全体が向上していく。人口圧は、人類に改善への刺激を与えることによって、文明と人間精神が相乗的に発展していくことを促すのである。結果として、個人の生命維持能力が高まり、上述の

一般法則に従って、人類の生殖能力が減退し人口圧が弱まっていく(TP 498-501)。

文明化の過程を通じてのみ、元々過剰な繁殖力が漸進的に減退し最終的に消滅しうる。同時に、過剰な繁殖力自体が文明化の過程を不可避にしてきた。最初からずっと、人口圧が進歩を引き起こす直接の原因であった。……最終的には必ずそうなるのだが、地球全体に人々が適切に広がり、居住地域全体で最高度の耕作が行われるようになった後 人間の欲求を満足させるすべての過程が最大限の完成状態に達した後 同時に、知性が完全にその機能を果たすまでに発達し、感情が社会生態 (social life) に完全に適応するまでに発達した後 これらすべてが実現した後、人口圧が徐々に機能しなくなるとともに徐々に消滅していくに違いない。(TP 501)

「人口理論」では、人間精神と文明が高度に発展すると、その発展を促してきた人口圧は、付随する害悪とともに消滅に向かうという結論が示されるのである。

1852年に提示されたスペンサーの人口理論と、最初の単著『社会静学』(1851)とのつながりは無視できない。『社会静学』でスペンサーは、理想社会で実現する完全な人間性を想定して正義の規則を探究し、社会生態 (social life) とよばれる理想社会に適応した人間の生を提起する。そして、理想社会で実現する 社会状態 (the social state) への適応過程として文明化をとらえ、自然法則に基づく必然的な進歩と結びつける。<sup>9</sup>

進歩は、それゆえ、偶然ではなく、必然である。文明は、人為的なものではなく、自然の一部であり、全体が胚発生や開花のように展開する。……確実に人間の能力が社会状態に完全に適応するように形成され、確実に悪と不道徳と呼ばれるものは消滅し、確実に人間は完璧になる。(SS 80)

1850年代初頭に提起された初期スペンサーの体系では、人間性が完成に向かう文明化も、文明化に伴う人口圧の減退も、自然法則に基づく理想社会への進歩の過程として位置づけられているのである。

『社会静学』に見られる初期スペンサーの体系では、人間本性の斉一性という考え方が批判され、変化する人間本性 を前提にして人間性が完成す

る理想社会が志向される。その人口理論は、マルサスの人口理論が提起する人口圧の二面性 のうち、進歩を推進する人口圧のみが強調されているように見える。「人口理論」で、人口圧が害悪を生み出すことに言及しているのは、理想社会では人口圧とともに付随する害悪も消滅するという文脈でだけだ(TP 500)。にもかかわらず、文明化に伴う人口圧の減退、理想社会における人口圧の消滅をスペンサーが論証しようとしたのは、進歩を妨げ理想社会を脅かす人口圧の性質を前提にしていたからだろう。人口圧を文明化の原動力として提示したスペンサーも、マルサスの人口原理が含意する理想社会批判を無視することは困難だったと考えられる。文明化の終着点として理想社会を想定する自らの進歩思想を確固たるものとするために、害悪を生み出し社会を不安定化する人口圧が理想社会では消滅することを示し、マルサスが普遍的な自然法則として提示した人口原理が過渡的な段階にのみ通用するものだ論証しなければならなかったのである。生命維持能力の増大にともなう生殖能力が減退するという初期スペンサーの人口理論は、普遍的な自然法則として論証しようとしているとはいえ、マルサスが批判した理想社会論を擁護するために展開されていると言えるのである。<sup>10</sup>

### 3 進化理論と社会改革 ウォレスの社会進化論

ダーウィンと同じく『人口論』第6版に刺激を受けて独自に自然選択のメカニズムを提起したウォレスは、1864年に「自然選択 理論から演繹される人種の起源と人類の黎明期」を発表する。この論文では、人種の起源をめぐる論争を自然選択理論によって総合するために、人類の進化が「精神能力」の獲得を分水嶺とする二つの段階に区分される。ウォレスによれば、「精神能力」を用いて環境の変化に対応できるようになった人類は、身体構造を環境に適応させる必要がなくなった。ゆえに、人類の身体構造は進化過程を免れて変化しなくなり、「精神能力」のみに自然選択が働くようになったとウォレスは考える。<sup>11</sup> この前提に基づいて、優れた人種が劣った人種を圧倒する人種間の生存競争を通じて人類の知性と道徳性が発展してきたと論じられる (OR clxiv-clxvi)。そして、人種の未来を述べた結論では、高度な精神性を持つ人種が暮らす理想社会が暗示される。

もし、私の結論が正しいなら、必然的な帰結として、高度な知的で道徳的な人種が低級で墮落した人種に取って代わり、自然選択の力はそのまますべて人間の精神組織に働き続け、人間の高度な能力が自然環境の条件と社会状態の要請にさらに完全に適応していくことになるに違いない。……精神構造は引き続き向上し改善し、最終的には、単一の均質な人種が再びこの世界に暮らすようになり、現在の人類の中で最も高貴な人にも及ばない人は誰一人いなくなる。(OR clxix)

「予言者や詩人の夢をとらえたのと同じくらい輝かしい楽園」(OR clxx)と述べられている進歩の終着点は、社会状態というキーワードでも暗示されている通り、スペンサー『社会静学』の理想社会である。人口圧が促す人種間の生存競争による人類の進化過程を示した「人種の起源」は、理想社会における人間精神の完成という楽観的なヴィジョンで締め括られているのである。

しかしながら、初期スペンサーの影響を強く受けた「人種の起源」の楽観的なヴィジョンは、1870年に「自然選択法則に従った人種の発展」と改題され単行本に収められた際には修正される。上記の引用部分に続いて、文明社会では道徳性と知性を発展させるように自然選択が機能せず、理想社会への進歩は遅々としたものだという悲観的なトーンが示されるのだ。しかし、一方でウォレスは、「適者生存」ではなく、人間精神に「内在する進歩の力」によって、知性と道徳性が着実に向上していくと論じる。<sup>12</sup> また、同時期に出版された『マレー諸島』(1869)の結論部分では、東南アジアの「未開」社会とヨーロッパの「文明」社会が比較され、不平等と罪悪が蔓延しているヨーロッパ社会こそ「野蛮」だと主張される。「人口が過密になった文明社会で不可避免的に生み出される厳しい生存競争も富をめぐる競争もない」マレー諸島の社会こそ、ウォレスによれば、ヨーロッパ社会よりも完全な社会状態に近づいた優れた社会なのだ。<sup>13</sup> この認識に基づいて、不平等を拡大し人間精神の発展を妨げている物質文明を転換しなければならないとウォレスは主張していくのである。<sup>14</sup>

社会問題に対して積極的に発言していったウォレスは、1890年の「人間選択」で、自らの進化社会主義を提起する。論文の冒頭では、適者を生存させる自然選択の過程が文明社会で働いていないことが問題視され、人種の向上

にはある種の選択が不可欠だと論じられる。獲得形質の遺伝を否定するウォレスによれば、教育など後天的に及ぼされた効果は次世代には受け継がれないので、人間性を発展させるには進化の過程を通じて先天的な精神能力を向上させるしかないのである。この点でウォレスは優生思想家と共通の前提に立っていた。にもかかわらず、人為選択の導入を主張する優生思想家とは一線を画し、平等な社会が実現すれば自然に選択過程が働き人種の向上が実現すると論じる(HS 325-31)。

しかし、貧富の差が解消し万人が教育を受けられる理想社会は、マルサスの人口圧に脅かされる。ウォレスは、マルサスの人口原理に言及して、そのような社会では人口増加が制限されず生存手段が不足しかねないことを認める。しかしながら、マルサスの人口原理の帰結を明示した上で、ウォレスは、目指すべき社会における人口圧の低減を論証しようとする。人口圧が低減する要因のうち最も重要なものは教育水準の向上と世論の影響で晩婚化がすすむことであり、もう一つは40年ほど前の「人口理論」でスペンサーが提起した理論である。ウォレスによれば、人間の能力が完全に陶冶され発揮される社会では、晩婚化と生殖能力の減退による出生率の低下で人口圧が平衡に向かい、最終的には「過剰人口という化け物」は絶滅するのだ(HS 331-35)。同時にウォレスは、エドワード・ベラミーのユートピア小説『かえりみれば』(1888)のエピソードに依拠して、人種の向上をもたらす一種の性選択過程を提起する。<sup>15</sup> 社会改革によって貧富の格差が解消され万人が十分な教育を受けられるようになると、結婚という手段によって男性に依存せざるを得なかった女性が、自由に結婚相手を選択できるようになる。結果として、不適者が生殖から排除されて知性と道徳性の優れた男性しか子孫を残すことができなくなり、人種の向上が実現していく(HS 335-37)。この性選択過程を柱とする自然の選択過程によって人間精神を発展させるためにも、社会改革が不可欠だとウォレスは主張するのである。

人間性の発展を強く望んでいたウォレスは、超自然的な存在に支えられた潜在力が進化のメカニズムを通じて発現することで、進歩がもたらされると考えていた。<sup>16</sup> 「人種の起源」で、人種間の生存競争を通じて人間性が発展し理想社会に到ると示唆したウォレスは、社会改革の必要性を強く主張した「人間選択」では、社会改革の結果、女性が自由に配偶者を選択することを通

じて人間性が発展していくと論じる。つまり、人種間の生存競争を通じて起こる、人口圧が促す進歩ではなく、一種の性選択による、人口圧に依存しない進歩を提起するようになるのである。にもかかわらず、理想社会と人口圧との両立不可能性というマルサス理論の帰結を前提にして、ウォレスは理想的な平等社会における人口圧の低減と最終的な消滅を論証しようとする。変化する人間本性を前提に人口圧の消滅を提起したウォレスは、人間性を発展させる自然の潜在力に対する信念を基盤にして理想社会のヴィジョンを示したのである。

#### 4 神義論なきマルサス主義      ハクスリー晩年の社会理論

自然に内在する進歩への潜在力を前提にした初期スペンサーとウォレスに対し、自然に対する楽観主義を批判したのが晩年のハクスリーである。<sup>17</sup> 1888年に発表された「生存競争」に描かれた自然は、道徳的意味も目的も存在しない現象の総体であり、必然的に進歩をもたらすわけではない。<sup>18</sup>

神学の側では、これ[自然が道徳とは無関係であること]は試練を課された状態であり、自然に存在するよう見える不正義と不道徳はやがて償われると言われる。しかしながら、感覚を持つ生物の大部分について、どのように償いが果たされるのかは明らかではない……

一方、進化論の側では、苛酷な生存競争は最終的に良い方向に向かうのであり、祖先の苦しみは子孫が完成に向かうことによって償われるのだと考えて溜飲を下げるように言われる。もし仮に、中国の流儀のように、現在の世代が祖先の恩義に報いることができるというなら、この議論にもいくらかの真理はあるだろう。そうでないなら、エオヒップスが、数百万年後にその子孫の頭がダービーを勝ったという事実から、その悲しみに対するどのような償いを得るのかは明らかではない。再び言うが、進化が絶えず完成に向かう傾向を意味すると想定するのは誤りである。その過程は、疑いなく、新しい環境条件に適應する過程での絶え間ない有機体の変化を含むが、生じる変化の方向が上昇か下降かは新しい環境条件の質によるのである。(SE 198-99)

ここで、ハクスリーはまず神義論を批判し、次に進化を進歩と同一視する議論をダーウィン進化理論に基づいて批判する。ダーウィン理論において、進

化の原動力は生存競争をもたらす人口圧であり、自然選択による環境への適応という進化過程には道徳的目的もあらかじめ定められた方向性も存在しないからである。

1893年の「進化と倫理 [ロマーニズ講演]」でも、自然に道徳性を見いだす議論が批判され、倫理と文明は宇宙過程と呼ばれる自然の過程に抵抗することによって形成されてきたものだと論じられる。<sup>19</sup> ハクスリーによれば、文明化を通じた進歩とは、生存競争と適者生存の宇宙過程に代わって、倫理的に最善のものが生き残る倫理過程が機能していくことなのである (RL 81)。さらに、「ロマーニズ講演」の序文として書かれた「プロレゴメナ」(1894)では、自然の状態 対 人為の状態 という対立図式が導入され、庭のアナロジーを用いて、人間社会と道徳が自然の状態に対抗する人為の状態だと位置づけられる。<sup>20</sup> また、庭づくりになぞらえられる倫理過程は、自然の生存競争を抑制して人間社会を発展させていくとともに、利己心などの自然的性質を抑制する人為的な人格、良心を発達させていく過程だと捉えられる。ハクスリーによれば、自然の進化過程を排除する倫理過程を通じて、人間社会と道徳が相互作用しながら高度に発展すると、人間本性を変化させる自然の進化過程が機能せず、人間本性がほぼ一定になる。結果として、文明社会では、人類が生存競争を通じて獲得し受け継いできた動物的本能が維持される (PR 26-40)。変化する人間本性を前提とする進化理論を基盤にしたハクスリー理論において、文明社会については不変の人間本性 というマルサス理論と共通の見解が導かれるのである。

文明社会の人間が自然界の動物と共有する性質のうち、ハクスリーが最も強調するのが生殖本能である (PR 20)。「生存競争」では、自らの欲望のままに生存競争を闘う自然人 (the natural man) と文明社会で自己を律する倫理人 (the ethical man) の対立図式を導入した上で、次のように述べる。

道徳的な目的を達成しようとする倫理人の努力も、道徳と関係のない道をたどるように自然人を駆り立てる深く根差した生物の衝動を、根絶することは絶対になかったし、緩和することも今までほとんどなかっただろう。生存競争の主要因でないとしても、生存競争に必ず付随する状況のひとつは、人間が他の生物と共有している、際限なく増殖する傾向である。注目に値することに、「生めよ。増やせよ。」は、伝承によると十戒よりもずっと古い掟であり、人類の

大多数が自発的に心の底から守ってきた多分唯一の掟なのだ。しかし、文明社会では、そのような掟を遵守すると、必然的な帰結として、社会組織が緩和し廃絶することを目指している生存競争 万人の万人に対する闘争 が、最大限に激しいかたちで再開する。(SE 205-06)

人類が生存競争を闘っていた祖先から受け継いできた生殖本能のために、文明社会にも、生存競争をもたらす不断の人口圧が存在する。それは、食糧不足による慢性的な貧困を生み出し、文明社会を不安定化する。それゆえ、文明社会の維持のためには、人口圧に抵抗し人口圧を制御し続けなければならない。最悪の場合には、社会の成立条件である相互の平和が失われ社会が崩壊するからだ。ここに、文明社会が直面する深刻なジレンマをハクスリーは見いだした。そのジレンマとは、そもそも生存競争を抑制するために成立したはずの人間社会が発展するにつれて、飢饉、疫病、戦争など人口増加に対する制限が働かなくなり、かえって生存競争を引き起こす人口圧が強まるというものである。つまり、社会が発展すればするほど、逆に社会を崩壊へと向かわせる圧力が高まるというジレンマなのである (SE 208-09; PR 20-21)。文明社会を脅かす人口圧を制御しないかぎり、どんなに社会を改革しても、どんなに富を再分配しても、社会を崩壊から救うことはできない (SE 211-12)。文明社会を生存競争に追い込み不安定化する人口圧にどう対処すべきかという問題は、ハクスリーによれば、「正真正銘のスフィンクスのなぞなぞであり、この謎を解けなかったすべての国が、遅かれ早かれ、その国自身が生み出した怪物に喰われる」のである (SE 212)。この問題こそ、晩年のハクスリーが格闘した思想課題であった。

自然の無目的性と文明社会を脅かす人口圧というハクスリーが強調した議論は、個人主義対集団主義 あるいは 個人主義対社会主義 と定式化される、国家の役割をめぐる論争の文脈で解釈されるべきものである。<sup>21</sup> 社会を発展させるためには個人の自由を最大化する最小国家が理想だと考えた個人主義に対しては、ハクスリーは無目的な自然を根拠にして批判を行う。社会の行く末を自然の過程に委ねても、進歩がもたらされるとは限らないからである。他方、国家による社会改革を通じて平等社会を実現しようとする社会主義に対しては、文明社会に生存競争を引き起こす人口圧を武器にして攻撃を加える。<sup>22</sup> 「生存競争」ではアトランティスの挿話が (SE 206-09)、「プロレ

ゴメナ」では完璧な為政者が統治する植民地の例が提示され (PR 16-21)、『人口論』初版と同様に人口圧による理想社会の崩壊過程が描かれる。「プロレゴメナ」の事例では、理想的な植民地を維持するために自然環境だけではなく人間自身も選択され改良される。しかしながら、上述のジレンマがここでも見いだされる。植民地が理想的な状態に近づけば近づくほど、人口増加への制限が働かなくなって人口圧が強まり、生存競争再開による植民地崩壊の危機が高まるのである。生存競争を阻止し植民地を維持するためには、為政者は社会に貢献する適者を選択し不適者を抹殺する人為選択を導入せざる得なくなる。しかし、ハクスリーによれば、現実には人間の能力で適者と不適者を選択することは不可能であり、もし優生学的な施策を導入しようとするれば人間社会の基盤を成す「社会の絆」が断ち切られることになる (PR 16-25)。ハクスリーが理想的な植民地の事例を通じて提起したのは、人為によって自然を完全に制御することの不可能性、すなわち、人口圧を初めとする自然の破壊的な力を人間が完全に抑え込むことはできないということなのである。「プロレゴメナ」の結論部分も、この観点から解釈されるべきである。

「政治的な動物」である人間は、教育と訓練によって、そして、人間の知性を使い人間の高度な要求に生活環境を適応させることによって、莫大な改善をもたらすことができるということに、私は少しも疑いを抱いていない。しかし、人間が、知性に関しても道徳に関しても、間違いを犯しやすいままであるかぎり 人間の目的と異なる目的を持つ人間の外部と内部の宇宙過程の力を監視し続けなければならないかぎり 消しがたい記憶とどうにもならない熱望にとりつかれるかぎり 人間の知性の限界を認めることによって、人間は存在の謎を見通すことができないと痛感させられるかぎり 平穏な幸福が達成されるのを見込むこと、あるいは、遠い未来にであれ、完璧という名に値するような状態になることを見込むことは、哀れな人類の眼の前につるされた幻想と同じように、人間を欺く幻想だと私には思えるのである。そして、そのような幻想がこれまで数多く存在してきたのである。(PR 44-45)

ここでは、実現不可能な人為的手段で自然を統制しようとする「幻想」だとして、人為選択による人種改良を主張する優生学だけでなく、社会改革によって平等社会を実現しようとする社会主義が批判されていると解釈できる。

つまり、人為で自然を完全に制御する理想状態が不可能である以上、社会を脅かす自然の破壊的な力に抵抗しつつ漸進的に社会を改善していくしかないという、個人主義と社会主義の中道を行くハクスリーの穏健改革路線が表明されているのである。

晩年のハクスリーは、理想社会を目指す社会変革を批判するために、マルサスと同様に、生存競争を引き起こし理想社会を挫く人口圧の破壊力を強調した。ハクスリーは、生存競争が抑制された文明社会では生殖本能を含めて人間本性はほぼ変化しないと論じ、変化する人間本性を前提にする進化論に基づいて文明社会における一定の人間本性という考えに至る。生殖本能が一定であるがゆえに、文明社会は常に人口圧の破壊力に脅かされるのだ。このようにして、ハクスリーはマルサスと同様に人口圧の普遍性を提起するが、マルサスが自然に見いだした神の摂理や、人口圧が文明や道徳を促進する巧妙な仕組みは、ハクスリーの自然には存在しない。道徳的目的も進歩に向かう方向性も存在しない自然は、人間と社会の目的に無関心な、性愛と戦いの女神イシュタルとして表される (SE 200, 207, 209)。ハクスリーの神義論なきマルサス主義では、進歩を促す人口圧の側面は完全に消え去り、文明社会を生存競争に追い込んで不安定化し理想社会の実現を阻む、進歩を妨げる人口圧の側面のみが強調されるのである。<sup>23</sup>

## 5 結論

マルサスと進化思想家がともに取り組んだ課題は、貧困問題への対応として、自然、人間、社会を横断する理論を展開することである。『人口論』初版では、人口圧が不断の競争と貧困をもたらすことを根拠に、無限の進歩と理想社会が不可能だと論じられるだけでなく、自然神学の枠組みで、害悪を生み出す人口圧が人間を活動的にし文明化を推進する原動力だとも論じられる。進歩を妨げるとともに促す人口圧の二面性という論点を引き継ぎつつ、進化社会理論は新たな様相を二点付け加える。第一点は、マルサスが両性間の情欲が消滅していくというゴドウィンの議論を批判して不変の人間本性を前提としたのに対して (FE 11-13)、生物進化という科学的真理によって変化する人間本性という観点が強調されたことである。第二点は、ダーウ

インが提起した自然選択のメカニズムにおいて、人口圧が生存競争を引き起こす進化の原動力だとみなされたことである。これらの観点から初期スペンサー、ウォレス、ハクスリーの議論を分析して明らかになるのは、マルサスが提起した人口圧の二面性という論点が、貧困、人口圧、進歩、理想社会をめぐる展開した進化社会理論に織り込まれているということである。

ハクスリーとウォレスが進化理論に基づいて社会問題への対応策を論じていたヴィクトリア時代後期は、ヤングの議論では、マルサスと進化理論家を結びつけた共通の思想的コンテクストが世俗化と専門化により断片化してしまっただと捉えられている。<sup>24</sup> しかし、進化社会理論においても、人口圧の二面性をめぐる論点は重要な構成要素であり、理想社会を脅かす人口圧という観点は貧困と進歩をめぐる議論と密接に結びついていた。それゆえに、ウォレスは初期スペンサーに依拠して理想社会における人口圧の消滅を論じたのであり、ハクスリーは理想社会論を批判するために生存競争を引き起こす人口圧を前面に押し出したのである。また、世紀転換期にかけての出生率低下に先だって、国力衰退につながる人口減少への危機感が表明されていたヴィクトリア時代後期は、<sup>25</sup> 同時に、貧困問題への関心が高まる中で、マルサスが喚起した問題が再び取り上げられていた時代でもあった。<sup>26</sup> 1877年、副題で「人口問題」への取り組みだと明記して若年夫婦の家族計画法を記したパンフレットを再出版したチャールズ・ブラッドローとアニー・ベサントは、猥褻文書を出版したとして起訴され、その裁判で産児制限以外に貧困問題を解決する手段はないと主張した。起訴直後の同年7月には、二人を中心にマルサス同盟が結成され、産児制限を柱とする新マルサス主義を推進していく。<sup>27</sup> また、マルサス理論への批判と土地私有の不正という議論がウォレスに大きな影響を与えた『進歩と貧困』(1879)が、1881年にイギリスでも出版され好評を博した。著者ヘンリー・ジョージがイギリスを訪れて行った講演が広く報道され歓迎される一方、『パンチ』(1884年1月26日)には、「社会主義」と書かれた帽子をかぶりポケットに『進歩と貧困』を忍ばせた狼が赤頭巾ちゃんをそそのかすイラストが掲載される。『進歩と貧困』は甘い言葉で社会主義を広めるものだという警戒感が、詩とイラストというかたちで表されているのだ。<sup>28</sup> さらに、ハクスリーの教えを受けたウェルズの『タイムマシン』(1895)では、理想社会のイメージを想起しながら802701年の世界

を観察したタイム・トラベラーが、「人口増加の困難を克服して……人口が増加しなくなった」競争のない社会だと誤解する。<sup>29</sup> しかし、社会問題を解決したと思われた未来社会で浮上したのがモーロックの食糧問題であり、食糧不足に伴う人口圧がモーロックを追い立て、結果的にエロイの人口を制限するように機能している。<sup>30</sup> このように、共通の議論がすでに断片化していたとヤングがみなした時代に、マルサスが提起した論点が幅広くとりあげられていたとすれば、貧困、人口圧、進歩、理想社会をめぐる共通の思想的コンテクストがヴィクトリア時代後期にも機能していたと言えるのである。

## 注

1. Adrian Desmond and James Moore, *Darwin* (1991; London: Penguin, 1992) 264-69.
2. Herbert Spencer, "The Proper Sphere of Government," *Political Writings*, ed. John Offer, Cambridge Texts in the History of Political Thought (Cambridge: Cambridge UP, 1994) 1-58.
3. Herbert Spencer, "A Theory of Population, Deduced from the General Law of Animal Fertility," *Westminster Review* 57 (1852): 468-501. 以後TPと表記し、本文中の括弧内に参照箇所を示す。
4. James Moore, "Wallace's Malthusian Moment: The Common Context Revisited," *Victorian Science in Context*, ed. Bernard Lightman (Chicago: U of Chicago P, 1997) 290-311; see also Alfred Russel Wallace, *My Life: A Record of Events and Opinions*, 2 vols. (London: Chapman, 1905) 1: 361-63.
5. Charles Darwin, *The Origin of Species by Means of Natural Selection, or the Preservation of Favoured Races in the Struggle for Life*, ed. J. W. Burrow, Penguin Classics (1859; London: Penguin, 1985) 114-72.
6. Alfred R. Wallace, "Human Selection." *Fortnightly Review* 48 (1890): 335-37. 同様に、以後HSと表記する。
7. Thomas Robert Malthus, *First Essay on Population 1798*, ed. James Bonar (London: Macmillan, 1926), rpt. of *An Essay on the Principle of Population, as It Affects the Future Improvement of Society, with Remarks on the Speculations of Mr. Godwin, M. Condorcet, and Other Writers* (London, 1798). 同様に、以後FEと表記する。
8. Robert M. Young, "Malthus and the Evolutionists: The Common Context of Biological and Social Theory," *Past and Present* 43 (1969): 109-45.
9. Herbert Spencer, *Social Statics; or, the Conditions Essential to Human Happiness Specified, and the First of Them Developed* (1851; New York: Appleton, 1880) 69-79. 同様に、以後SSと表記する。
10. 人間性の完成と理想社会に至る進歩の必然性を提起する初期スペンサーの社会理論は、マルサスが批判したゴドウィンに連なる理性主義的非国教派 (rational dissent) の流れに位置づけられるだろう。Young もスペンサーの進化理論をゴドウィンに近い反マルサス主義に位置づけているが (134-37)、若きスペンサーは、理性主義的非国教派の理想社会論と進歩思想を支えるようにマルサスの人口理論を受容したと考えられる。近年出版された以下のスペンサー研究もスペンサー思想の起源として非国教派の宗教と思想の重要性を強調している。Mark Francis, *Herbert Spencer and the Invention of Modern Life* (Stocksfield: Acumen, 2007); Michael W. Taylor, *The Philosophy of Herbert Spencer*, Continuum Studies in British Philosophy, ed. James Fieser (London: Continuum, 2007).
11. Alfred R. Wallace, "The Origin of Human Races and the Antiquity of Man Deduced from the Theory of 'Natural Selection,'" *Journal of the Anthropological Society of London* 2 (1864): clxii-clxiv. 同様に、以後ORと表記する。
12. Alfred Russel Wallace, "The Development of Human Races under the Law of Natural Selection," *Contributions to the Theory of Natural Selection: A Series of Essays* (1870; London: Macmillan, 1875) 330-31.
13. Alfred Russel Wallace, *The Malay Archipelago: The Land of the Orang-utan and the Bird of Paradise: A Narrative of Travel with Studies of Man and Nature*, New ed. (London: Macmillan, 1922) 455-58.
14. 心靈主義を受容したウォレスは、1869年から人間精神の起源は自然選択説では説明できないと論じるようになる。しかし、自然を超越する知的存在が人間精神をもたらしたと論じるようになった後も、人間の精神能力は自然選択を通じて発展していくとウォレスは論じ続ける。転向と呼ばれるウォレス理論の変化と後半生の進化社会主義との関係については、FUJITA Yuh, "Evolutionary Theory and the Idea of Civilization: Alfred Russel Wallace's Path to Evolutionary Socialism," *Bulletin of the Graduate Division of Letters, Arts and Sciences of Waseda University II*. 54 (2009): 25-50.
15. ウォレスが影響を受けたと思われる箇所は、Edward Bellamy, *Looking Backward 2000-1887* (1888; New York: Modern-Random House, 1951) 208-20.
16. 進歩に対する強い信念を支えたウォレスの目的論的な世界観を強調する研究は、Martin Fichman, *An Elusive Victorian: The Evolution of Alfred Russel Wallace* (Chicago: U of Chicago P, 2004).
17. ハクスリーの自然観については、Oma Stanley, "T. H. Huxley's Treatment of 'Nature,'" *Journal of the History of Ideas* 18 (1957): 120-27; James G. Paradis, *T. H. Huxley: Man's Place in Nature* (Lincoln: U of Nebraska P, 1978) 115-63; James G. Paradis, "Evolution and Ethics in Its Victorian Context," *Evolution and Ethics: T. H. Huxley's "Evolution and Ethics" with New Essays on Its Victorian and Sociobiological Context*, eds. James G. Paradis and George C. Williams (Princeton: Princeton UP, 1989) 20-24.
18. Thomas H. Huxley, "The Struggle for Existence in Human Society," *Evolution & Ethics and Other Essays* (London: Macmillan, 1911) 195-202. 同様に、以後SEと



表記する。

19. Thomas H. Huxley, "Evolution and Ethics [The Romanes Lecture, 1893]," *Evolution & Ethics and Other Essays* (London: Macmillan, 1911) 46-116. 同様に、以後 RL と表記する。
20. Thomas H. Huxley, prolegomena, "Evolution and Ethics," 1894, *Evolution & Ethics and Other Essays* (London: Macmillan, 1911) 9-15. 同様に、以後 PR と表記する。  
自然の状態 対 人為の状態 という対立図式がもつ政治的意味については、藤田祐「自然と人為の対立とその政治的含意 T・H・ハクスリーの進化社会理論」『イギリス哲学研究』27 (2004): 39-54.
21. 個人主義対集団主義の論争についての概説は、Michael Taylor, introduction, *Herbert Spencer and the Limits of the State: The Late Nineteenth-Century Debate between Individualism and Collectivism*, ed. Michael Taylor, Key Issues 13, ed. Andrew Pyle (Bristol: Thoemmes Press, 1996) vii-xxiii. この論争のコンテキストでのハクスリーの議論は、Thomas H. Huxley, "Government: Anarchy or Regimentation," *Nineteenth Century* 27 (1890): 843-66, rpt. in *Methods and Results* (London: Macmillan, 1904) 383-430.
22. ハクスリーの攻撃目標はウォレスだと主張し、「進化と倫理」における社会変革への批判とマルサス主義の重要性を強調する先駆的な研究は、Michael S. Helfand, "T. H. Huxley's 'Evolution and Ethics': The Politics of Evolution and the Evolution of Politics," *Victorian Studies* 20 (1977): 159-77.
23. Paradis は、Helfand のハクスリー解釈が一面的であるとしながらも、「進化と倫理」が理想社会論への批判というマルサス『人口論』初版と全く同じ理由で書かれたと論じ("Victorian Context" 5-8)、ハクスリーはマルサスの影響を強く受けながらも、神義論というマルサス理論の「目的論的な上部構造」を完全に捨ててしまったと論じている("Victorian Context" 9-13; see also 38-39).
24. Robert M. Young, "Natural Theology, Victorian Periodicals, and the Fragmentation of a Common Context," *Darwin's Metaphor: Nature's Place in Victorian Culture* (Cambridge: Cambridge UP, 1985) 126-63.
25. Jose Harris, *Private Lives, Public Spirit: Britain 1870-1914* (1993; London: Penguin, 1994) 45-50.
26. ヴィクトリア時代後期の文化、特に『タイムマシン』と関連させて、進化理論とマルサスの人口原理を取り上げている著作は、丹治愛『神を殺した男 ダーウィン革命と世紀末』講談社選書メチエ 14 (講談社, 1994 )
27. Rosanna Ledbetter, *A History of the Malthusian League 1877-1927* (Columbus: Ohio State UP, 1976) 25-55.
28. Fichman 220-34, 246-49; "The Old Story," *Punch, or the London Charivari* 26 Jan. 1884: 42-43.
29. H. G. Wells, *The Time Machine: An Invention*, ed. Stephen Arata, A Norton Critical Edition (New York: Norton, 2009) 27.
30. Wells 50, 61-62.